縄文文化の起源年代をめぐって

——山内清男・佐藤達夫両氏と、芹沢長介氏との間の「論争」は本当に決着したのか——

小野田　正　樹

1.

縄文文化の実年代に関して二つの相異なる見解が対立して久しい。一つは、実年代を^{14}C年代測定法に求める立場であり、他の一つは、日本列島の周辺地域との文物の型式学的比較研究に基づき、すでに明らかになっている大陸側の年代から実年代を推定する、という考古学独自の方法に基づく立場である。前者の立場によれば、縄文文化の開始年代はおよそ12,000年前であり、これは、大方の研究者の支持を受け、すでに定説化している意見といっても過言でない。これに対して、後者の立場に立つ山内清男氏は縄文文化の上限年代をB.C.2500年頃と推定しているが、現在氏の説を支持する研究者は皆無に等しい。

ところで、この問題をめぐっては、1950年代の中頃から1970年頃までの長い間、山内清男・佐藤達夫両氏と、芹沢長介氏との間で激しい「論争」が展開された。しかるに、「論争」とは述べたものの、両者の間を含めて、研究者間でこの問題に関して、実質的な討議が行われたことはなかったといえる。あれからすでに三十余年の歳月がたち、関係諸氏が次々と不帰の客となられたこともあり、すでに多くの人々はこうした「論争」があったことさえ忘れてしまっているかのように、筆者には思われる。「論争」の結着がついていないのに、いつのまにか過去の問題となってしまったわけである。もちろん、若い研究者の多くが、こうした「論争」を学史上のエピソードの一つとしてしか認識できないことは、同時代に生きていなかったことを考慮するといたしかたないことのように思われる。しかるに、当時渦中にいた人々はもちろん、多少なりともそれに関心をもって関わってきた人々にも、やはり同じような傾向が認められることにはいささか首をひねらざるをえない。確かに、縄文文化の研究が、年代論に決着がついたわけではないにもかかわらず、次第にそれを離れて、考古学本来の目的の一つである当時の生活様相の復元に重点がおかれるようになり、その結果、研究が深化したことも、多くの研究成果の示す通りであろう。しかるに、だからといって、年代論が軽視されてよいわけではあるまい。筆者がこうした感想を持つのは、^{14}C年代に依拠した縄文文化の実年代に大きな疑念をいだかざるをえないからであり、しかもそれが生活様相の復元とも密接に関わりあってくるからにほかならない。

その点、後者の立場に立つ山内・佐藤両氏の提唱された見解は、いろいろな角度からみて論理に矛盾をきたさずに、さまざまな問題の説明がつく点で、現在でも依然として極めて有効な仮説であると考えられる。しかるに、芹沢氏をはじめとする、両氏を「批判」する研究者諸氏は、両氏の仮説をくつがえす考古学的証拠を提示できないまま、自らの見解を繰り返し主張するだけなのである。もちろん、それにかわるべき新たな仮説が提唱されたことはいまだかつて一度もないのである。これは一体どうしたわけであろうか。これでも両者の「論争」は決着したとはたしていいうるであろうか。

さらに言えば、両者の「論争」は、縄文文化の開始年代がいつか、という問題にとどまらず、それに先行する時期の石器文化の評価にも直接関わる大問題も内包しているのである。現在、縄文文化に先行する時期の文化はすべて「旧石器文化」であり、それは旧大陸の旧石器文化に文化的にも、年代的にも対比しうるものである、とする見解が通説となっている。しかるに山内氏が主張しているように、もし縄文文化の開始年代を大幅に引き下げなければならないとすれば、その大半は「旧石器文化」とはいえなくなってしまうことになる。即ち、日本列島にLubbockの概念規定でいう「Paleolithic Age」があったか否かという問題にもなるわけである。

そこで、本稿では、両者の「論争」をふりかえることにより、縄文文化の開始年代がいつであるかと

いう問題が、今日でも依然未解決のままであることを明らかにしたいと思う。

2.

縄文土器の編年研究は、1937年までにその大綱がほぼ完成されていた[註(1)]。即ち、縄文時代全期は早・前・中・後・晩期の五期に大別され、各時期には多数の細別型式が配置されていた。最も研究が進んでいた関東地方の早期についてみると、そこには三戸式、田戸下層式、子母口式、田戸上層式、茅山式などのいくつかの土器型式の存在が知られているにすぎなかった。しかし、その実年代については明らかでなかった。

ところが、1941年になって、白崎高保氏[註(2)]が、東京都稲荷台遺跡で、関東ローム層上部にくいこんだ状態で、砲弾形の尖底で、外面に撚糸文のある「稲荷台式」土器を発見した。そして、土器がローム層にくいこんでいたことから、これが極めて古い時期のもので、「沖積世」初頭に近い時期の所産である、と考えられるようになった。そして、1942年には、矢嶋清作氏[註(3)]が、東京都井草遺跡で「稲荷台式」に似た形態を有し、口縁部が肥厚外反し、その外面に縄文が施された、「井草式」土器を発見し、紹介した。

こうした新たな土器型式の発見をうけて、後藤守一氏は、1943年、それらの土器の年代について、「少くも七・八千年も前のものであらうと思はれるのです」と述べて[註(4)]、はじめて実年代について触れられたのである。氏のこの発言は、戦争中になされ、氏らが所属していた団体の思想とよく合致したものであった、という点は考慮しなければならないが、はなはだ重要な指摘であったといえる。後にこの推定された実年代は^{14}C年代測定法によって追認されることになるわけである。これについては後述する。

こうした氏の発言の背景には、関東ローム層は「洪積世」(更新世)の堆積層であり、したがって年代的には10,000年前以前のものである、とする明治時代以来、地質学界で信じられてきた「常識」があったことは容易に推測できる。この地質学の「常識」が正しいという前提にたてば、古式縄文土器が関東ローム層にくいこんだ形で出土していたので、その土器の実年代を「七・八千年も前のものであらう」、と推定したとしても、それ自体は論理的に矛盾しているとはいえないであろう。もちろん、それが正しい実年代か否かは全く別の問題である。

こうした縄文文化初頭の新型式の土器の発見は戦後も続き、1949年には甲野勇・吉田格両氏が「花輪台式[註(5)]」(茨城県花輪台貝塚を標式)を、同じく1949年に、芹沢長介氏が「大丸式[註(6)]」(神奈川県大丸遺跡を標式)を、そして、1957年に、杉原荘介・芹沢長介両氏が「夏島式[註(7)]」(神奈川県夏島貝塚を標式)をそれぞれ報告された。さらに、長崎県福井洞穴[註(8)]、愛媛県上黒岩洞穴[註(9)]、新潟県小瀬が沢洞穴[註(10)]、同室谷洞穴[註(11)]、山形県日向洞穴[註(12)]、同一の沢洞穴[註(13)]をはじめとする一連の洞穴遺跡の発掘調査によって、それ以前にはまったく知られていなかった、「井草式」よりもさらに一層古い土器が次々と発見されるにいたったのである。

そして、実年代に関していえば、縄文土器の年代決定に新たに^{14}C年代測定法が応用されるようになり、その結果、研究の様相が一変することとなった。とりわけ古式縄文土器には予想をはるかにこえた、極めて古い年代が与えられ、これが後の「論争」の発端になるわけである。

ところで、^{14}C年代測定法による年代は、1956年にはすでにその成果の一部が公表されていた[註(14)]。即ち、千葉県姥山貝塚の中期の土器(後期堀之内式として報告)に対して3,938±500年B.P.、4,513±300年B.P.、4,546±200年B.P.、4,850±270年B.P.、丸木舟と櫂を出土した千葉県検見川泥炭遺跡では後期に3,075±180年B.P.、そして、同じく丸木舟を出土した千葉県加茂泥炭遺跡では、前期の諸磯a式土器に5,100±400年B.P.の^{14}C年代がそれぞれ与えられていた。

ところが、1959年になって、夏島貝塚で、「早期初頭」の「夏島式」に伴って採集された貝塚や木炭に、9,450±400年B.P.、9,240±500年B.P.という、従来の年代観では想像もつかないような、極めて古い測定値が与えられていることが公表された。

これを契機として、^{14}C年代に対する疑問が明確な形で提示されるようになった。即ち、西南アジアや北ヨーロッパなどの旧大陸における土器の初現年代からみれば、日本の縄文文化に与えられたこのよ

うな実年代は極めて古すぎる、というのがその理由であった。そして、それ以降、縄文文化の開始年代をめぐって、山内・佐藤両氏と、芹沢氏との間で激しい「論争」がくりひろげられることになるのである。

以下、それについて具体的にみていくことにしよう。ただし、問題が多岐にわたるので、本稿では、縄文文化の直前に位置づけられ、その上限年代を推定する重要な手掛りを与えてくれる、青森県長者久保遺跡[註05]や長野県神子柴遺跡[註06]などから出土している円ノミを含む局部磨製の片刃石斧に焦点をあてて、両者の「論争」について考えてみることにしたい。

まず、1959年、芹沢長介氏[註07]は^{14}C年代を根拠にして縄文文化開始の実年代を9,000年前におき、「縄文土器はいまのところ世界最古の土器だという結論がうまれてくる」と主張された。ただし、これは、当時最古の土器と考えられていた撚糸文土器に関する発言ではあったが、氏は日本列島の周辺地域に撚糸文土器がみられないこともまた縄文土器の古さを証明するものである、とみなし、「日本をふくむ東亜一帯に、世界最古の土器が分布する」という予想を述べた。

そして、芹沢氏は、翌1960年、『石器時代の日本[註08]』の中で、長者久保遺跡出土の石器群[註05]に極めてよく似ている、局部磨製の大形石斧や大形の石槍などを含む神子柴遺跡出土の石器群[註06]にはじめて触れ、それを「いまのところでは、細石器と縄文文化のあいだにくる過渡的な文化」であろうと考えられた。そして、その根拠として、神子柴出土の石器群は縄文文化の石器とも、「従来から知られていた無土器文化」の石器とも異なる性格が認められること、局部磨製石器が新石器時代の特徴を有しながら土器を併出していないこと、「無土器時代終末期にさかえた細石器の併出」が認められないこと、そして、小瀬が沢洞穴で、神子柴出土の石器に極めてよく似た大形石斧や石槍が「縄文早期初頭」の土器や石鏃などと同じ層位からまとまって発見されていること、などの諸点をあげている。そして、神子柴の実年代に関しては直接触れてはいないが、氏が、縄文文化の開始年代を9,000年前、細石器文化の年代を10,000年前と推定していることから、その実年代を9,000～10,000年前と考えていたことは推測できよう。ちなみに、縄文文化の開始年代を9,000年前としたのは、前述した夏島貝塚から得られた^{14}C年代がその根拠になっていたことは明白であるし、細石器文化の実年代を10,000年前と推定したのは、氏がその時期を「洪積世の終末か、あるいは沖積世の初頭」、即ち、関東ローム層堆積の終末の前後頃と考えていたことがその根拠となっていたと推測できる。とくに、後者については、当時最古の土器と考えられていた撚糸文土器が関東ローム層にくいこんだ状態で発見され、夏島貝塚でそれらに前述した^{14}C年代が与えられたことがその根拠になっていたことはもちろんであるが、むしろ、前述したが、明治時代以来、関東ローム層は「洪積世」に属する、という地質学界の「常識」――もちろん、これには確固たる科学的根拠があったわけではない――がその背景にあったものと考えられる。皮肉にも、何ら科学的根拠のなかった「常識」が、新たに考古学に応用された^{14}C年代測定法によって裏付けられた形になったわけである。

このような、神子柴出土の石器群を細石器文化と縄文文化との間の、橋わたしをする文化である、とした芹沢氏の見解は、論理的に矛盾があるわけではなく、それなりに十分納得できるものといえる。しかるに、そのことが、神子柴出土の石器群の実年代が9,000～10,000年前である、とする氏の年代推定の根拠にはいささかもなりえないことも、また確かなことである。即ち、氏が縄文文化の開始年代を9,000年前と考えたのは、^{14}C年代がその根拠になったものであるし、細石器文化と関連して考えられた、関東ローム層堆積の終末の年代にしても、それを10,000年前とする積極的な根拠は^{14}C年代をおいてほかにはないといえるのである。この点は、後の両者の「論争」を考える上ではなはだ重要な点であるので、とくに指摘しておきたい。

氏はこれ以降も一貫して、縄文文化の実年代決定にさいしては^{14}C年代を積極的に採用し、それを重視する態度をとり続けるのである。

こうした、芹沢氏の見解を代表とする、^{14}C年代に依拠して、縄文文化の開始年代を決定しようとする考え方に対して、山内・佐藤両氏は1960年から着手した長者久保遺跡の発掘を契機として、それと時

間的に並行する時期のものと考えられる神子柴出土の石器群を含めて、それらの実年代について画期的な見解を公表された。

山内・佐藤両氏は、1962年、はじめてこの問題を提起[註019]され、さらに1964年の論文[註020]で一層詳細に自らの主張を述べておられる。即ち、両氏は、長者久保出土の円ノミと、それとは「別種類」に属しているが、幾多の共通点を有する神子柴の小形円ノミに関して、両者はほぼ同一時期に属するものであり、無土器文化の終末に位置づけられる、と考えられた。そして、それらの石器群の実年代については、長者久保の円ノミが、シベリア、バイカル湖地方の新石器編年第Ⅱ期のイサコヴォ期（B.C.4,000年紀）の円ノミと型式学的に極めてよく似ていることを根拠として、B.C.3,000年頃と推定された。したがって、縄文文化の直前に位置づけられる長者久保や神子柴の推定年代から、縄文文化開始の実年代はさかのぼってもせいぜいB.C.3,000年頃が限度である、と考えたのである。ここにはじめて、縄文文化開始の実年代に関して、それを直接示すものではないが、それの上限年代がB.C.3,000年頃であるとする、考古学独自の方法によって推定された年代が与えられることとなった。

この両氏の年代観は、すでに年代が確定している日本列島の周辺地域との文物の型式学的比較研究に基づいて推定したものであり、その点でも極めて画期的な仮説といえる。ちなみに、筆者は、山内氏らの仮説はなお多くの問題点を内包しているとはいえ、現在でも依然有効な仮説であると考えており、支持したい。

ところで、こうした両氏の問題提起は、実年代推定の根拠を^{14}C年代に求めていた芹沢氏の見解に対する、考古学側からの痛烈な批判だったと理解できる。即ち、それはとりもなおさず^{14}C年代の信憑性に対する疑義の表明であったわけである。

これに対して、芹沢氏は再三にわたって「反論」をこころみているので、以下、それについて詳しく検証してみることにしよう。

まず、1964年発表の書評[註021]の中で、山内氏らの見解に「批判」を加えている。即ち、第一に、山内氏らが日本の「無土器文化」が新石器時代に含められるという見解の根拠とされた磨製石器の問題について、氏は、諸外国では旧石器時代の遺跡においてさえ磨製石器が出土する事例が報告されていることを引用し、磨製石器が出土するからといってただちにそれを新石器時代の所産である、と推定することは早計である、とした。そして、次に、山内氏らがシベリア、イサコヴォ期の流れを受けたものであるとみなした円ノミについて、「日本の丸のみ形石斧の方がイサコヴォのそれよりも年代がくだるという証拠はひとつもないし、またシベリアではイサコヴォ以前に丸のみが絶対なかったともいいきれないのである。さらにイサコヴォ文化の実年代が規準となりうるほどたしかであるかどうか、それさえはっきりしない状態なのである」と述べ、山内氏らがただ単に両者が型式学的に類似しているという理由だけで対比しているのは、あまりにも「早急な結論」である、と述べている。そして、以上の理由によって、縄文文化開始の上限年代をB.C.3,000年頃と推定している山内氏らの年代観は、何らその理論的根拠がない空理空論にすぎないものとみなし、縄文文化の開始年代はB.C.7,000年までもさかのぼりうる、という^{14}C年代に依拠した従来からの年代観を繰り返し主張しているのである。

そして、1965年には、前年発表の書評の中で多少触れていた「旧石器時代」にも磨製石器が存在するという問題を取り上げ[註022]、さらに詳細に氏の主張を述べておられる。即ち、氏はSemenov氏の“Prehistoric Technology[註023]”中に図示されている、石器として再使用された後期旧石器時代の石核の刃部に磨滅の痕跡が認められる事実を引用し、「北海道出土の磨痕あるプラットフォームをもつ石刃も、もとは使用によって磨痕の生じた石核から打ちはがされたものであろう」と述べ、その例証として、北海道モサンル遺跡出土の遺物をあげておられる[註024]。そして、モサンル遺跡から局部磨製の片刃石斧が出土していることを紹介し、それが長者久保・神子柴や小瀬が沢などから出土しているものに類似していることを指摘され、こうした日本列島出土の「丸ノミ形石器」について、山内氏らはシベリアのイサコヴォ期からの影響を考え、B.C.4,000年の実年代を与えているが、「モサンル遺跡は沖積世初頭の遺跡と考えられるし、大陸でも洪積世末期から石核を道具として再使用した形跡がみられるので、石核から発展した

蓋然性のつよい丸ノミ形石斧の起源は、4,000年B.C.よりもはるかにさかのぼってよいはずである」と述べ、それら一連の局部磨製の片刃石斧をイサコヴォ期のものと対比する必要はまったくないと主張している。

氏のこうした主張を読むと、氏は、長者久保・神子柴・小瀬が沢やモサンルから出土している局部磨製の片刃石斧を一連の文化的系統のうちにあったものと理解していたことがわかる。そして、モサンル遺跡を「沖積世初頭」の遺跡とみなしているので、他の遺跡もやはり「沖積世初頭」の頃の所産であり、したがって、それらには山内氏らが推定しているB.C.4,000年よりもはるかにさかのぼる実年代が与えられなければならない、というのである。こうした氏の見解は、前述したように「沖積世」初頭に10,000年前頃の実年代を与えていたことを考えると、氏にとっては当然の論理の帰結であったといえよう。確かに、モサンル遺跡を「沖積世初頭」の遺跡である、とする地質学的所見は提示されてはいるが、片刃石斧を出土するそれら一連の遺跡の実年代が10,000年前である、とする考古学的根拠はここでも見出すことはできず、実年代の根拠は^{14}C年代をおいてほかにはないのである。

さらに、1965年、縄文文化と周辺地域との文化的関連を論じた[註(25)]さいにも、個々のさまざまな遺物を取り上げて、詳細に自説を展開している。

とくに、円ノミについて限ってみてみると、「イサコヴォ期と神子柴遺跡とのあいだには一脈の類似点もあるけれども、それよりもなお大きな相異が存することをみおとしてはならない。山内・佐藤のようにかんがえるなら、イサコヴォ文化が日本へつたえられる途中で、土器・細石刃・石鏃などのもっとも重要な要素が脱落してしまったことになる。シベリアにおいてもイサコヴォ期以前に、神子柴に対比されるべき土器以前の石器文化が将来発見されるとかんがえるべきであろう」と述べ、山内氏らの仮説は円ノミの型式学的類似のみによったもので、土器などの重要な要素が欠落している点について何ら説明がなされておらず、その主張には大いに問題がある、と指摘している。しかしながら、本論文においても、「細石刃は大陸の旧石器時代終末もしくは中石器時代に対比されてよい」とか、福井洞穴などから出土している隆線文土器は、当時中国最古の土器であると氏が考えていた、満州のオロス貝塚出土のものに重要な関連があるなどの考古学的な指摘はあるものの、そうした指摘が長者久保などの円ノミの実年代が10,000年前にさかのぼりうるとする根拠とならないことは明らかであるし、氏はあいかわらず実年代の決定を^{14}C年代に負っているといえるのである。なお、極めて奇妙なことであるが、本論文では長者久保の円ノミにはまったく触れられていないのである。

以上、山内・佐藤両氏が提起された仮説に対する芹沢氏の「反論」について、氏のいくつかの論文を取り上げてみてきた。

それによると、氏は多くの問題について触れてはいるが、長者久保や神子柴出土の円ノミの実年代に関しては、終始一貫してほぼ同じ主張を繰り返しているのである。即ち、氏は、山内氏らが指摘した長者久保出土の円ノミとイサコヴォ期のそれとの間に「一脈の類似点」があることを一方で認めながらも、両者が型式学的に極めてよく似ていることを明確に否定することなく、「サモンル・長者久保・神子柴・小瀬が沢」などから出土し、同一の文化的系統のうちにあったと考えられている局部磨製の片刃石斧を「沖積世初頭」の所産であり、したがって、イサコヴォ期のものと直接対比すべきものではなく、むしろ、「シベリアではイサコヴォ以前に丸のみ形石斧が絶対なかったといいきれない」し、「大陸でも」「丸のみ形石斧の起源は4,000年B.C.よりもはるかにさかのぼってよい」し、「シベリアにおいてもイサコヴォ文化以前に神子柴に対比されるべき土器以前の石器文化が将来発見されるとかんがえるべきであろう」と述べているのである。

このような氏の発言をみてくると、氏が、山内氏らの問題提起——換言すれば、長者久保や神子柴、モサンルなどから出土している円ノミを含む局部磨製の片刃石斧の実年代が10,000年前であるとする、^{14}C年代以外の考古学的証拠は一体何か——に対して、その本質をとらえて反論を試みているとはとうていいいがたい。むしろ、そこにはそれを避けているとしか思われない態度がうかがえるのである。

山内氏らの仮説の核心をつかずに、そこから波及するさまざまな問題を取り上げていくら批判したところで、それは山内氏らの仮説をくつがえすことにはまったくならないのである。しかし、氏はそれら一連の論文で、長者久保などの円ノミの実年代に関して、新しい資料に基づいて、山内氏らの年代観を否定する新たな仮説を提示しているわけでもなく、再三にわたって氏の主張を繰り返しているだけなのである。氏が円ノミを含む局部磨製の片刃石斧の編年的位置を「沖積世初頭」におき、シベリアのイサコヴォ期のものと直接対比すべきものでないとしたのは、むしろ当然のことであったと考えられる。即ち、それら一連の石器の編年的位置に関する根拠は前述した1960年の見解の範囲を一歩も出ていないといってよいし、実年代についても、^{14}C年代以外にそれらを10,000年前であると主張する積極的根拠はまったくないのである。

ところが、芹沢氏は、1967年、再びこれらの石器群についての見解を述べておられる[註(28)]。氏は、モサンル・長者久保・神子柴出土の石器群を一連の関連あるものとみなし、とくに、長者久保の石器群に関しては、地質学的に「八戸パミスに対比される」時期のものであると推測し、八戸パミスに与えられている12,700±270年B.P.の^{14}C年代を採用して、その年代を「12,500～13,000年B.P.までさかのぼる」とする新たな年代観を提示された。そして、それら一連の石器群は新潟県荒屋遺跡に代表される細石器文化の直後に出現したものであると考えられた。そして、「沖積世初頭」の時期と考えられた群馬県元宿や同武井、長野県馬場平や同踊場などの遺跡から出土した石器群を加え、これらの石器群は、いずれも土器をまったく併出していないという共通した特徴をもっているので、「本州最古の隆線文土器以前におかれるはずであり」、「^{14}C年代からみれば」、元宿や武井などから出土した石器群が「上部ローム層に属する」ことから、その年代は板鼻褐色軽石層に与えられている「13,300±650年B.P.」よりは新しく、前述の長者久保の円ノミに対比した八戸パミスの^{14}C年代を合わせて考えると、それらの石器群の実年代は「ほぼ13,000～12,000年あたりに位置すると考えておくのが妥当であろう」と結論を下しているのである。

このような芹沢氏の見解は、先に検討したいくつかの論文の主張と同様、それら一連の石器群の実年代を推定するさいに、確かに地質学的所見や隆線文土器、石器組成などの根拠はあげてはいるものの、^{14}C年代が決定的な論拠となっていたことは疑いないことといえる。ちなみに、それらの一連の石器群の実年代を「ほぼ13,000～12,000年あたり」と「考えておくのが妥当であろう」とした背景には、荒屋遺跡の細石器文化に13,200±350年B.P.、福井洞穴第7層の「小石刃」に13,600±600年B.P.、福井洞穴第3層出土の隆線文土器に12,400±350年B.P.と12,700±500年B.P.、上黒岩岩陰の隆線文土器に12,165±600年B.P.などの^{14}C年代が、それぞれ与えられていたという事実があったことは容易に推測できる。もしも、これらの^{14}C年代がなかったとしたら、氏が長者久保などから出土している一連の石器群の実年代を12,000～13,000年前と推定することなどほとんど不可能に近いといわねばならない。

以上、長々と山内・佐藤両氏の仮説に対する芹沢氏の「反論」について検討してきた。

それによると、氏は、長者久保や神子柴などから出土している円ノミを含む一連の局部磨製の片刃石斧の実年代を推定するさい、終始一貫して^{14}C年代にその根拠をおいていたのである。そもそも、考古学的独自の方法に基づいた山内・佐藤両氏の問題提起は、まさに芹沢氏が年代論の論拠とした^{14}C年代の信憑性に対する疑問であったわけだから、それに対する氏の反論は当然^{14}C年代に対する考古学的な裏付けを提示しなければならなかったはずである。しかるに、氏の幾多の論文を詳細に検討しても、氏の年代観の根拠となっている^{14}C年代を裏付ける考古学的証拠を見出すことはできなかった。この点で、氏の主張は両氏の批判に対して正面から反論を試みているとはとうていみなしがたく、むしろ、反論を回避しているように受けとられてもいたしかたないであろう。

3.

以上、縄文文化の直前に位置づけられ、それの開始の実年代を推定する最も重要な手掛りとなってい

る、長者久保や神子柴出土の円ノミを含む局部磨製の片刃石斧に焦点をあてて、芹沢氏と、山内・佐藤両氏との間でなされた「論争」についてふりかえってみた。とくに、「論争」の経過をたどることにより、それが内包している根源的な問題が一体どこにあるかについて重点をおいて考えてみた。

そもそも筆者がこの問題を取り上げたのは、両者の「論争」が学史上のエピソードの一つにすぎず、すでに決着ずみの問題である、として、何ら根拠がないにもかかわらず、ただ漠然と、^{14}C年代に基づく年代観を支持している大方の研究者の意見に同意することができなかったからであり、それが依然未解決の今日的課題であると理解しているからにほかならない。

ところが、芹沢氏の年代観は物理学の厳密な理論に基づく^{14}C年代測定法にその根拠を求めている点で、いかにも合理性があり、信憑性があるかのように一般的には受けとられており、大方の研究者の支持も受けていた。しかるに、^{14}C年代に依拠した氏の年代観は、山内氏らの問題提起にもかかわらず、いかなる考古学的裏付けももっていなかったのである。とすれば、^{14}C年代に基づいた芹沢氏の年代観と、それを批判して提起された山内氏らの考古学独自の方法によって推定された年代観の、どちらをわれわれの年代論の出発点とすべきかはもはや自明のことといえる。したがって、現時点では、考古学的裏付けをもたない^{14}C年代に、縄文文化開始の実年代を推定する根拠を求めることはできないのである。

では、一体その根拠を何に求めたらよいのであろうか。

前述したように、縄文土器の編年大綱は1937年までにほぼ完成されていた。そして、それ以降も、研究の進展につれて新型式の土器の発見があい次ぎ、土器の編年研究は詳細を極めている。そして、現在では日本列島全域に及ぶ精密な編年が確立されているといってよい。また、縄文文化に先行する時期の編年についても、大まかではあるが、不二山、権現山Ⅰ・Ⅱ、岩宿Ⅰ、権現山Ⅲ、ナイフ形石器、細石器、長者久保・神子柴の各段階に細分できよう。しかるに、たとえいかなる精密な編年が確立されたとしても、それは、個々の文物の相対的な新旧関係を示すものとはなるが、決してそれらに実年代を与えるものとはならないのである。したがって、そこには実年代を与えるための何らかの規準が必要となるわけである。すでに述べたように、筆者はその規準を^{14}C年代以外に求めるべきであるとする立場にたつものである。たとえば、日本列島と、すでに何らかの規準によって実年代が明らかにされている周辺地域との間に共通した文物が認められる場合、それら文物の型式学的比較研究をし、両者の相関関係から日本列島の実年代を推定しようとする方法が、考古学的には最も正統な研究法であるといえる。^{14}C年代に依拠せずとも、こうした方法によって、日本列島ですでに確立している編年に、実年代を与える一つの規準を得ることができるわけである。もちろん、これには、日本列島と他地域との間に何らかの文化的な関連があったことが証明されなければならない、という前提条件があることはいうまでもないことである。この方法は、世界史的視野にたって日本列島の先史文化の実年代を推定しようとするものであり、考古学的方法に基づいた極めて有効な手段といえる。こうした方法によって実年代が明らかになってはじめて、日本列島の先史文化が世界の先史文化の一環を構成することになるわけである。しかるに、日本列島から出土している文物が、他地域出土のものと型式学的に類似していることがたとえ認められたとしても、それだけの理由のみでそれら両地域の間に文化的な関連があったとみなすことはできないのである。故に、日本列島と他地域との間に文化的な関連があったか否かを判断するさいには、多方面からの十分な検討が必要であることは当然のことといえる。

縄文文化の直前に位置づけられる、長者久保・神子柴・モサンルなどから出土している一連の局部磨製の片刃石斧に関しては、芹沢氏と、山内・佐藤両氏の評価は、とくに実年代については大きな違いが認められるものの、それの系統については、両者共、日本列島の周辺地域、とりわけ東北アジア方面との密接な文化的関連があったことを指摘しているので、前述した方法は、すでに確立している日本列島の編年に実年代を与える手段として極めて大きな可能性を含んでいるものといえよう。長者久保出土の円ノミに関する山内・佐藤両氏の評価[注019・020]は、まさにこうした可能性を明示したものであったとみなすことができよう。

これに対して、芹沢氏は、1967年、次のような見解を明らかにしている[注021]。即ち、シベリアにおける

土器の起源に関する研究の現状について、

「オクラドニコフによれば、シベリア上部旧石器文化は、マンモスが消失してからヴェルホレンスク山遺跡、オシュルコヴオ遺跡下層などの文化によって終りを告げる。沖積世の初頭におかれる文化としては、オシュルコヴオ上層から出土した細石刃、剥片、礫片などがある。ウスト・キャフタ第一、第二地点出土の石器もこれとほぼ同じく、半円錐形の石核・細石刃・石刃を用いた有舌尖頭器（？）その他がみられる。石刃を用いた有肩尖頭器を特徴とするヒン文化は、これらのあとにくると書かれている。しかも、現在までにシベリアの沖積世初頭から新石器時代開始期までの文化と考えられる遺跡は、叙上のオシュルコヴオ上層、キャフタ第一、第二地点、ヒンなどをのぞけばきわめて不明瞭である。沖積世の開始から新石器時代最古のイサコヴォ期までの約四千年間の空白を、これらわずかな資料が埋めているにすぎない」

と述べ、シベリアでは、土器の起源についてまだ十分な研究がなされているとはいいがたいと主張するのである。

こうした氏の見解は直接的には土器の発生についてなされたものではあるが、その背後に山内氏らが提起した円ノミの問題を十分意識してなされたものであることは想像にかたくない。即ち、この芹沢氏の見解は、前述した山内氏らへの「反論」の中で、「シベリアではイサコヴォ以前に丸のみ形石斧が絶対になかったともいいきれない」とか、「大陸でも」「丸のみ形石斧の起源は4,000年B.C.よりもはるかにさかのぼってよい」とか、「シベリアにおいてもイサコヴォ文化以前に神子柴に対比されるべき土器以前の文化が将来発見されるであろう」と述べている発言と表裏一体をなすものといえよう。

こうした氏の見解自体はシベリアでの研究成果を正しく把握した上でなされたものではあろうが、「沖積世の開始から新石器時代最古のイサコヴォ期までの約4,000年の空白を」「オシュルコヴオ上層、キャフタ第一、第二地点、ヒンなどの」「わずかな資料が埋めているにすぎない」点をいかに強調したとしても、そのことは決して長者久保の円ノミとイサコヴォ期のそれとの型式学的類似を否定することにはならないのである。したがって、本論文の主張に関しても、先に検討した諸論文の延長線上にあるもので、その主旨にはいささかの変化もなく、反論としてはあいかわらず具体性に欠けるものといえるのである。むしろ、問題は、自らの年代観の正当性を主張するために、シベリアにおける考古学研究が日本列島のそれと比較して著しく立ち遅れていることを強調することにより、自らの仮説の弱点をおおいかくそうとしているようにも受けとれる氏の学問的姿勢にあろう。

このようにみてくると、長者久保の円ノミとイサコヴォ期のそれとの型式学的類似を否定せずに、しかも新たな考古学的証拠を提示することもなしに、あいかわらず「シベリアでは」「神子柴に対比されるべき土器以前の石器文化が将来発見されるであろう」と繰り返し述べることは、もはや無意味なことであり、ましてや、日本列島を含む東アジアにおける土器発生の実年代が12,000年前までさかのぼりうる、と主張することは、まったく根拠がないことといってよいであろう。

ひるがえって、山内・佐藤両氏が提起された「無土器文化新石器時代論」には大きな二つの論拠があったと理解できる[註09・20]。即ち、その一つは、群馬県岩宿遺跡出土の「楕円形石斧」や、長野県茶臼山遺跡と栃木県磯山遺跡出土の「半楕円形石斧」がインドシナ方面のホアビニアン文化にその系統をたどりうる点であり、他は、長者久保の円ノミがシベリア、イサコヴォ期のそれに系統をたどりうる点であった。両氏の「無土器文化新石器時代論」はまさにこの二点を最も重要な根拠として立論された仮説であるといえる。故に、両氏の仮説に対する批判は、当然それら二点に関するものでなければならないはずである。したがって、それら二点に対する本質的な批判を回避して、それらに付随するもろもろの問題点をいくら取り上げて批判したところで、それは決して両氏の仮説を根底からくつがえすものとはならないのである。

芹沢氏の「反論」には、再三指摘しているように、そうした傾向が顕著に認められ、とくに、「無土器文化新石器時代論」の論拠の一つであった、長者久保の円ノミに関しても、それをくつがえすような考

古学的証拠に基づいた仮説を提示することなしに、将来長者久保や神子柴に対比されるべき石器文化が発見されるであろうことを繰り返し主張するだけなのである。しかしながら、シベリアで長者久保や神子柴に対比されるべき資料が現在まで検出されていない以上、氏の主張は将来にわたる不確実な可能性をよりどころとしたものにすぎず、反論としてははなはだ説得力に欠けるものがあるといえる。山内・佐藤両氏の仮説を批判するのであれば、まず、その論拠となっている長者久保の円ノミがイサコヴォ期のものに型式学的に類似していないことを論証すべきである。それを回避して、山内氏らの仮説を批判することはほとんど無意味なことといえる。

なお、つけ加えると、1971年にいたっても、芹沢氏は次のように述べ[注29]、あいかわらず従来と同様の主張を繰り返しているのである。

「モサンル・長者久保・神子柴などから出土している片刃石斧は、多くの場合土器を併出しないが、田沢では隆線文土器を併出している。したがって、片刃石斧は土器のない時期から土器をもつ時期にかけて製作されたものである。これらは筆者の見方からすれば、日本の中石器時代もしくは晩期旧石器時代（13,000～12,000B.P.）にふくめられる。その根拠は、石器組成、隆線文土器、C－14年代、地質学上などの所見を総合した判断によるものであり、これまでにしばしば述べているのでここでは省略する。したがって大陸の石器とこれらを対比し、しいて関連を求めようとするなら、やはりシベリアからアムール河流域にかけての後期旧石器時代の終末から中石器時代にかけての文化をとりあげるべきであろう」

本論文でも、やはり、長者久保をはじめとする一連の局部磨製の片刃石斧を含む石器群の実年代を12,000～13,000年B.P.と推定し、「その根拠は、石器組成、隆線文土器、C－14年代、地質学上の所見などを総合した判断による」ものであると述べているのである。しかるに、実年代推定の根拠が^{14}C年代以外にないことは、再三指摘してきたように明らかである。

以上、縄文文化開始の実年代を推定する重要な手掛りを与えてくれる長者久保や神子柴出土の円ノミを取り上げ、芹沢氏と、山内・佐藤両氏との間でなされた「論争」について考えてきた。

それによると、長者久保の円ノミの実年代が12,000～13,000年前にさかのぼりうる、と推定した芹沢氏の見解は、隆線文土器、石器組成や地質学的所見があったとはいえ、^{14}C年代に実年代の根拠をおいていたことは明白であり、一方、それを裏付ける考古学的な証拠はどこにもなかったのである。そもそも、本来、^{14}C年代による実年代の決定は、考古学独自の方法による実年代の推定とはなじまないものであり、したがって^{14}C年代に依拠した芹沢氏の年代観は考古学的にみる限り認めがたいといわねばならない。このことは、なにも芹沢氏のみに限ったことではなく、年代決定を^{14}C年代に依拠しているすべての研究者にもあてはまることは、いうまでもないことである。

ところで、筆者は、山内・佐藤両氏が「無石器文化新石器時代論」を提起したさい、第二の論拠としてあげている、長者久保の円ノミがイサコヴォ期のそれに系統をたどりうるとした見解には、前にも指摘したが、なお多くの問題を含んではいるが、極めて画期的な仮説として高く評価している。そして、筆者の縄文文化の年代観も両氏の仮説にその大半を負うているといってよい。即ち、筆者は縄文文化の開始年代はB.C.3,000年を上限として、それよりさかのぼることはできないが、一方、それをどの程度まで引き下げるべきかは、現在のところ考古学的な証拠が得られているわけではないので明確になしえない、と考えている。ただ、縄文文化の開始年代は、草創期初頭の土器に伴って出現し、山内氏[注29]によって大陸方面からの「渡来石器」の一つと認定されている「矢柄研磨器」を手掛りにすると、それの日本列島への伝播経路などは依然証明されているとはいいがたいが、それの大陸側での年代、とりわけ日本列島の周辺地域であるシベリア、満州、沿海州などでの出現時期を考慮すると、B.C.2,000年頃と推定しておくのが考古学的には最も穏当な意見であろうと考えている。しかし、これについては、旧大陸の各地で、旧石器文化から新石器文化にかけてみられる「有溝石器」との系統的なつながりの有無、大陸側

での出現時期の確定、大陸側の資料との比較考究、資料の絶対量の不足、伝播経路など、まだまだ未解決の問題が山積しており、その解明には長い時間を要しよう。

ところで、1966年、芹沢氏[注29]は新潟県中林遺跡の発掘を契機として、縄文文化とそれに先行する細石器文化とをつなぐ時期——氏のいう「晩期旧石器文化」あるいは「中石器文化」——の標式的な石器として、「丸のみ形石器」にかわり、新たに「有舌尖頭器」を取り上げたのである。

こうした氏の編年観は、1972年出版の『最古の狩人たち[注30]』や、1982年出版の『日本旧石器時代[注32]』の中でも述べられており、その後一貫して変わることはなかった。それとは対照的に、1966年以降、「丸のみ形石斧」が議論の中心として取り上げられることはほとんどなくなってしまった。この点は、これまでの氏の編年観からみるとはなはだ疑問といわざるをえない。このことからも、氏が「丸のみ形石斧」の解釈にいかに窮していたかをうかがい知ることができよう。

しかるに、「有舌尖頭器」に関する氏の仮説は、紙数に限りがあるので、本稿では詳細に触れることはできないが、十分な考古学的裏付けをもったものとはいえず、成立しがたい。即ち、本州出土の「有舌尖頭器」は、土器の併出の有無にかかわらず、それを伴う石器群の石器製作技術に、無土器文化の強固な伝統である石刃技法を欠いており、無土器文化に属するものとはみなしがたい。むしろ、本州の「有舌尖頭器」は、土器を伴出していない事例としてあげられている、中林遺跡出土例や新潟県本ノ木遺跡出土例、福井県鳴鹿遺跡出土例などを含めて、すべて縄文文化の段階に属するものと考えてまちがいない。いいかえると、無土器文化に「有舌尖頭器」は存在しないのである。

これに対して、北海道出土の「立川ポイント」は、一般には本州の「有舌尖頭器」と同一系統で、しかも同一時期に属するものと考えられているが、それを伴う石器群の石器製作技術に石刃技法を有している点からみると、明らかに「有舌尖頭器」とは所属文化の段階を異にしたものであり、無土器文化の時期と考えるべきである。したがって、北海道の「立川ポイント」を、氏のように本州の「有舌尖頭器」の範ちゅうに含めて議論をすることはできないのである。

このように、「有舌尖頭器」は土器の併出の有無にかかわらず、縄文文化に属するものであり、決して無土器文化と縄文文化とをつなぐ石器とはなりえないのである。「有舌尖頭器」に関する氏の仮説が成立しがたいことが明らかになったことにより、かえって円ノミを含む局部磨製の片刃石斧の重要性が増してしまったことは、氏にとってはいかにも皮肉なことであったといえる。縄文文化とそれに先行する細石器文化とをつなぐ時期の石器は、芹沢氏の主張するように「有舌尖頭器」ではなく、山内・佐藤両氏が述べているように、円ノミを含む局部磨製の片刃石斧と大形の石槍に代表される石器群であり、このことは、両者の石器が、縄文文化の初頭の時期と、その直前に位置づけられる長者久保・神子柴の時期に共通して認められることからも明らかなように、疑いないことといえる。

4.

以上、縄文文化開始の実年代をめぐって、芹沢氏と、山内・佐藤両氏との間でなされた「論争」について、とくに、縄文文化の実年代を推定する重要な手掛りとなっている、長者久保や神子柴などから出土している円ノミを含む局部磨製の片刃石斧を取り上げ、それの実年代の問題に焦点をあてて検討してきた。

現在、縄文文化開始の実年代をおよそ12,000年前におくとする、芹沢氏に代表される、^{14}C年代に依拠した年代観が、大多数の研究者の支持を受けているという実態を踏えて考えると、両者の「論争」はすでに決着がついており、学史上のエピソードの一つにすぎないと理解されてもいたしかたないであろう。そして、いまや、^{14}C年代測定法は考古学研究の最も重要な問題の一つである年代決定には必須のものであり、それは世界各地でおおむね正確な年代を指示している、と説明されており、^{14}C年代に基づく縄文文化開始の実年代についても何ら疑義をさしはさむ余地はない、といわれているのである。

しかるに、両者の「論争」をふりかえってみて明らかなように、それがほんとうの意味で決着したと

はとてもいいがたい。むしろ、実質的な討議が行われたことはなかったといった方がよいように思われる。

即ち、山内氏らが、1962年に長者久保遺跡の発掘調査を契機として提起された「無土器文化新石器時代論」の仮説は、繰り返し述べているように、芹沢氏が実年代推定の根拠としていた^{14}C年代の信憑性に対する考古学側からの痛烈な批判であったと理解できる。しかるに、それに対する氏の「反論」は、いずれも、両氏の仮説の論拠の一つとなっていた、長者久保の円ノミがシベリア、イサコヴォ期のそれに型式学的に極めてよく似ており、それに系統を求められる、とする点を否定することなしに、^{14}C年代の正当性を繰り返し主張するだけだったのである。即ち、氏の「反論」は、両氏が提起した仮説の本質に関わる問題についての批判は回避し、それから付随的に導き出された問題点に集中していたのである。これでは、いくら「反論」の形をとっているとはいえ、真の意味での反論にはなっていないといえる。したがって、こうした議論をいくらつみ重ねたところで、それは、山内氏らの仮説を根底からくつがえすことには決してならないのである。むしろ、芹沢氏は、山内氏らの問題提起——^{14}C年代に基づいた芹沢氏の年代観に対する批判——に対して、有効な反論を提示できないまま、回答に窮していたといえる。再三指摘しているように、縄文文化開始の実年代が12,000年前にさかのぼりうる、とした氏の見解には、石器組成、隆線文土器、地質学上の所見などの根拠はあげられてはいるが、それらが与えられている実年代を直接推定しうる根拠になるわけではないので、その根拠が^{14}C年代以外にないことは明白である。しかも、推定された実年代（12,000年前）を裏付けるような考古学的な根拠もまったくなかったのである。

このように、山内氏らの仮説に対する芹沢氏の批判はいずれも反論の呈をなしているものとはとうていいいがたく、したがって、両者の「論争」は依然決着をみていないといってよい。この意味で、縄文文化の起源年代がいつかという問題は、明らかに、現在でも依然未解決であり、縄文文化の研究の重要な課題の一つといえるのである。

このような批判の対象となっているのはなにも芹沢氏に限ったことではない。これは、^{14}C年代を実年代推定の根拠としているすべての研究者にもあてはまる問題であり、すでに解決済みの問題である、として頬かぶりを決めこむわけにはいかないのである。

このように、長者久保の円ノミに関する山内氏らの仮説は、現在までそれをくつがえすほどの反証があげられておらず、したがって依然有効であるといえる。とすれば、縄文文化開始の実年代は、長者久保の円ノミにB.C.3,000年頃という推定年代が与えられているので、それをさかのぼることはできず、その上限年代はB.C.3,000年頃ということになろう。これが現在のところ考古学的方法に基づいて推定された、最も確実な縄文文化の上限年代であるといえる。ちなみに、筆者は、縄文文化の開始年代を、草創期初頭の土器に伴って突然出現する「矢柄研磨器」を手掛りとして、それの日本列島周辺地域での出現年代を考慮して、B.C.2000年頃と推定している。しかし、これについては、草創期初頭の「矢柄研磨器」と大陸側の資料との間に系統関係があったことが十分論証されているとはいいがたい点など、問題点も少なくない。これについては今後多方面からの十分な検討が必要と思われる。

最後に、芹沢氏をはじめ、^{14}C年代に依拠して実年代を推定している研究者諸氏に、再度お聞きしたい。

「縄文文化開始の実年代を12,000年前である、とする^{14}C年代以外の考古学的証拠は一体どこにあるのか。言いかえると、そうした^{14}C年代を裏付ける考古学的証拠は一体何なのか」と。

しかしながら、そもそも両者の「論争」の核心は別のところにあったのかもしれない。日本列島の周辺地域との文物の型式学的比較研究によって、すでに明らかになっている大陸側の年代から縄文文化の実年代を推定しよう、という考古学独自の方法に基づいて推定された年代は認めず、一方では、考古学とは分野をまったく異にする物理学の理論に基づいた^{14}C年代を絶対視するという、芹沢氏らの学問的

態度には、考古学研究の根本に関わる極めて重大な問題が内包されているといえる。かつて、佐藤達夫氏は、「両者の相違は単に年数あるいは各文化の位置づけにあるのではなく、その根底に考古学の基本に関わる方法論の相違がある」と指摘したことがある[註(33)]。同感である。われわれ考古学に従事する研究者は、「人文科学」や「社会科学」における「方法論」の意味を今一度銘記すべきであろう。

註

(1) 山内清男「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号、1937年
(2) 白崎高保「東京稲荷台先史遺跡――稲荷台式系土器の研究(1)」『古代文化』第12巻第8号、1941年
(3) 矢嶋清作「東京都杉並区井草の石器時代遺跡――井草式土器について」『古代文化』第13巻第9号、1942年
(4) 後藤守一『先史時代の考古学』績文堂、1943年
(5) 甲野勇・吉田格「縄文土器編年図集――花輪台式土器」1949年
(6) 芹沢長介「神奈川県大丸遺跡の研究」『駿台史学』第7号、1949年
(7) 後藤守一「夏島貝塚」『科学朝日』第10巻第7号、1950年
芹沢長介「横須賀市夏島貝塚」『日本考古学年報』3、1955年
杉原荘介・芹沢長介『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学文学部考古学研究室報告第二冊、1957年
杉原荘介『夏島貝塚』中央公論美術出版、1964年
(8) 鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』第3巻第1号、1965年
芹沢長介『福井洞穴調査報告』図録編、長崎県文化財調査報告第4集、1966年
鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社、1967年
(9) 江坂輝弥・岡本健児・西田栄「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』平凡社、1967年
(10) 中村孝三郎『縄文早期小瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館研究調査報告第三冊、1960年
(11) 中村孝三郎『室谷洞窟』長岡市立科学博物館調査報告第六冊、1964年
中村孝三郎「新潟県室谷洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社、1967年
(12) 加藤稔「日向の尖頭器と早期縄文土器」『山形考古』第5号、1958年
柏倉亮吉・加藤稔「山形県東置賜郡日向洞穴群（俗称立石）」『日本考古学年報』8、1959年
加藤稔「山形県日向洞穴における縄文時代初頭の文化」『山形県の考古と歴史』、1967年
佐々木洋治『高畠町史　別巻考古資料編』、1971年
(13) 加藤稔・佐々木洋治「山形県一ノ沢岩陰遺跡」『上代文化』第31・32合併号、1962年
佐々木洋治『高畠町史　別巻考古資料編』、1972年
(14) 杉原荘介「日本考古学における実年代」『貝塚』第57号、1956年、『日本先土器時代の研究』所収、講談社、1974年
杉原荘介「9,000年前の日本」『朝日ジャーナル』第1巻第22号、1959年、『日本先土器時代の研究』所収、講談社、1974年
杉原荘介「神奈川県夏島貝塚出土遺物の放射性炭素による年代決定」『駿台史学』第12号、1962年、『日本先土器時代の研究』所収、講談社、1974年
(15) 平尾勲・角鹿扇三・佐藤達夫「甲地村長者久保出土の石器」『上北考古会誌』第1号、1960年、佐藤達夫『日本の先史文化』所収、河出書房新社、1978年
山内清男・佐藤達夫「縄紋土器の古さ」『科学読売』第14巻第13号、1962年
山内清男・佐藤達夫「日本先史時代概説」『日本原始美術』第1巻縄紋土器、講談社、1964年
山内清男・佐藤達夫「青森県上北郡甲地村長者久保遺跡調査略報」『人類科学』第17号、1965年
山内清男・佐藤達夫「下北の無土器文化――青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告」『下北』九学会編、平凡社、1967年
(16) 藤沢宗平・林茂樹「神子柴遺跡第一次調査」『古代学』第9巻第3号、1961年
(17) 芹沢長介「日本最古の文化と縄文土器の起源」『科学』第29巻第8号、1959年
(18) 芹沢長介『石器時代の日本』築地書館、1960年
(19) 山内清男・佐藤達夫「縄紋土器の古さ」『科学読売』第14巻第13号、1962年
(20) 山内清男・佐藤達夫「日本先史時代概説」『日本原始美術』第1巻縄紋土器、講談社、1964年
(21) 芹沢長介「書評「日本原始美術Ⅰ縄文土器」」『文化』第28巻第3号、1964年

(22) 芹沢長介「旧石器時代の磨製石器」『歴史教育』第13巻第3号、1965年
(23) Semenov,S.A. *Prehistoric Technology*, Adams & Dart,1964.
(24) 芹沢長介「北海道モサンル遺跡出土の石器」『日本考古学協会第31回総会研究発表要旨』、1965年
芹沢長介「周辺文化との関係」『日本の考古学』第2巻縄文時代、河出書房、1965年
(25) 芹沢長介「周辺文化との関係」『日本の考古学』第2巻縄文時代、河出書房、1965年
(26) 芹沢長介「日本の旧石器(6)」『考古学ジャーナル』第10号、1967年
芹沢長介「日本の旧石器(7)」『考古学ジャーナル』第11号、1967年
(27) 芹沢長介「旧石器時代の終末と土器の発生」『信濃』第19巻第4号、1967年
(28) 芹沢長介「旧石器の諸問題——1969年度における研究」『考古学ジャーナル』第53号、1971年
(29) 山内清男「矢柄研磨器について」『日本民族と南方文化』平凡社、1968年
(30) 芹沢長介「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『東北大学日本文化研究所研究報告』第2集、1966年
(31) 芹沢長介『最古の狩人たち』古代史発掘第1巻、講談社、1974年
(32) 芹沢長介『日本旧石器時代』岩波書店、1982年
(33) 佐藤達夫「無土器文化の石器」『日本歴史』第276号、1971年

(湘南短期大学教授)